

琉球大学学術リポジトリ

遠隔授業と教育の質保証

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学グローバル教育支援機構 公開日: 2021-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小野寺, 清光 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48492

遠隔授業と教育の質保証

小野寺 清光（グローバル教育支援機構副機構長・開発室長）

2020年度は、新型コロナウイルス感染症（COVIT-19）の感染拡大防止に終始した一年であった。前年末から世界的に拡大し始め、琉球大学においても卒業式や入学式が中止となり、政府及び自治体の緊急事態宣言に伴い、新学期の授業は全て遠隔での開始となった。遠隔授業は多くの教員が経験不足のため、4月22日から5月6日は準備期間とし、遅くともゴールデンウィーク明けの5月7日から授業開始することとした。この間、教員および学生に対して、遠隔授業の実施形態や留意事項などをまとめたポータルサイト「遠隔授業等の活用に関するガイドライン」を教務情報ホームページにて公開し、教員に対しては基礎的な遠隔授業の実施方法などに関するFD講習会を開催するなどの対策を行った。新学期が一段落する頃には教員や学生へアンケートを実施し、その意見・情報から課題抽出し、解決方法や有益な情報を集約して「FDガイド遠隔授業編」に取りまとめて大学ホームページに掲載し、各教員が継続的に授業改善するための糧とした。

前学期は、LMS（学習管理システム）、Teams、Zoom、Youtubeの活用など、教育がフィジカルからサイバー空間に一気にシフトした。そして、教員の悩みどころは、遠隔授業において対面と同等の教育効果をいかに得るか、アクティブラーニングなど体験型の要素をいかに導入するかなど、まさに共感を生み出すUX（ユーザーエクスペリエンス）の視点である。UXは、WebデザインやWebマーケティングで注目されているが、インストラクショナルデザインでも活用され教育とも親和性が高い。

近年、UX向上を目指す設計指針として、狩野モデルが注目され国内外を問わず活用されている。狩野モデルは1970年代後半に提案され、製品やサービスにおいて、要求仕様を満たす品質充足度が顧客満足度向上に直接繋がるとの一元的なアプローチに異を唱えた新たな品質管理指針である。このモデルでは品質管理を2次的に表現し、横軸に要求仕様充足（客観的指標）、縦軸に顧客満足（主観的指標）を取る。従来の品質の考え方は充足と満足が比例関係になる一元的品質（One-dimensional Quality）だが、実際にはこの範疇に入らない品質があり、そのひとつは、不十分だと不満だが必要以上に充足しても満足度は向上しない当たり前品質（Must-Be Quality）、もう一つは、なくても（不十分でも）不満ではないし機能するが充足していると満足度が向上する魅力品質（Attractive Quality）であるという。私がこの狩野モデルを始めて知ったのは、20年ほど前に学振委員会での東芝機械（現芝浦機械）の方の講演であった。当時の日本製品は、安全性や耐久性、つまり当たり前品質には定評があったが、ソニーやアップル製品を例に挙げながら、これまでの当たり前品質重視のMust設計から魅力品質を採り入れたDelight設計の重要性を主張していた。

このような品質管理指針や品質分類の考え方は、教育の質保証や教育効果の向上にも参考になると考えられる。客観的指標と主観的指標は、教育における直接評価と間接評価にも通じる。3つのポリシーの策定整備、シラバスチェックや授業点検の恒常化、メタループリック、更にラーニングポートフォリオなどの謂わば当たり前品質が満足されることは勿論のこと、ボディーワーク、ロールプレイング、話し合いなどを活用したアクティブラーニングなどを活用した魅力品質を満たすなど、遠隔授業が導入されたこの機会に、改めて教

育の質保証を考えたい。

今回のセンター報では、教育の質保証・向上に役立つ内容が多数含まれている。リメディアル教育としての学習サポートの取組み、プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞した教員の先進的な授業の取組み、更に琉球大学の特色ある教育として、教育のグローバル化を推進する取組、学生の複眼的な思考力や総合的な理解力を育成する副専攻などである。これらの内容を活かしながら、教育の質保証や教育効果向上に向け更なる大きな一歩を踏み出したい。